共同研究プロジェクト「表象に関する総合的研究」
2008 年度第一回研究会

日時：2008 年 6 月 28 日（土曜日）午後 1 時半より 6 時
場所：AA 研マルティメディア室
報告者とタイトル：
1. 真島一郎氏（AA 研所員）
「大杉栄のソレル理解―生と力は浮遊するか」
2. 齋藤晃氏（AA 研共同研究員、国立民族学博物館）
「スペイン領南米における共和主義の史的展開」

報告要旨

大杉栄のソレル理解 ── 生と力は浮遊するか

人類学的思考にとり「力」とは何だったのかという問いは、翻って、そのおなじ思考にとり「神話」とは何だったのかという問いの再来＝想起をうながす。

人類学史にとってのソレル問題は、この問いの地点に端を発するのだし、ソレルに少なからぬ影響をうけた大杉栄の問題に問いを置換する試みからは、「社会」「個人」「自由」などといった明治期以来の漢語を再考する契機がひらかれてもこよう。

二十世紀第一・四半期の日仏における「生命」もしくは「連帯」関連の思想を対比しようとする視点にとってのキーワードは、生の哲学、（ドイツ由来の）社会政策学、そして社会連帯主義となる。一方、これと大なり小なり関連する大杉栄の言説世界を、本報告では以下の八ジャンルに分けて概観した。

１．生
２．生の闘争
３．本能、“盲目的 inconscient”、純粋持続
４．「社会」「道徳」「力」、その両義性
５．反社会主義（反経済学主義…審級論／反議会主義）
６．自由連合主義
７．“少数者 minorité agissante”、前衛、超人
８．あやうさ

大杉栄のソレル評価は、「力」「神話」「道徳」の諸概念に直接・間接のしかたで関連しながら、大いに揺動していた。そのことを再考するためには、たとえばソレルにおけるデュルケム社会工学の批判的摂取、きわめて預言的なマルクスならぬマルクス「主義」の解体、さらには「政治的ベルクソニスム」との連関についての思索が欠かせない。そしてそのうえであらためて大杉栄の思想にたちもどることにより、大杉もふくめた「社会／的なもの」の物語全般に蔓延する二価

性の深みを測定することも可能となるだろうし、「反経済主義が神話にもたらす空白」（ラクラウ＆ムフ）の奥行を、大杉、ソレル両者について推し量る誘惑もひとまず促されてこよう。くわえてそのさい、大杉・ソレル系の思考のセリーと並行して走るのは、おそらく、ガブリエル・タルドを介した大杉栄と米田庄太郎の、また、幸徳秋水を介したルイ・ブランとルナンの連繋という、副次的ながらも「かつて存在しなかったはずの人類学史」にとっては興味の尽きない問題系である。

（真島　一郎）

配布物：レジュメと資料

スペイン領南米における共和主義の史的展開

政治思想史における共和主義の議論のなかで、ラテンアメリカが言及されることはまれである。ポーコックの『マキャヴェリアン・モーメント』に触発されたシヴィック・ヒューマニズムの議論は、イタリアからイギリス、そして北米へという流れを追うのが主流であり、スペインはもとより、ラテンアメリカは蚊帳の外である。ラテンアメリカ史においても、植民地時代には君主政が、独立後には寡頭政がおもな議論の対象であり、共和政に注目する研究は少ない。

本報告は、その注目されざるラテンアメリカの共和政、とりわけスペイン領南米のそれを前景化する試みである。その目的はふたつある。

(1) スペインによる征服以後の南米において、近代スコラ学の流れをくんだ共和主義が、18 世紀以降ヨーロッパから持ち込まれた思想的潮流とは別に存在していたことを示すこと。

(2) スペイン領南米の先住民社会において、植民地化の過程で導入された共和主義の制度や理念が内面化され、18 世紀になって結晶化したことを示すこと。

本報告が注目する共和政は、スペイン人や先住民の都市や町の自治である。スペイン領南米では、植民地化の過程で各地に都市や町が建設された。それらはいずれも自治組織として市参事会を備えていた。それらの都市や町のひとつひとつ、およびその市参事会が、当時の言葉で「レプブリカ república」と呼ばれていた。

従来、スペイン帝国は強大な集権国家であり、その統治下、都市や町は政治的自律を喪失し、衰退していったと考えられてきた。しかし、この見解はほんとうに正しいのだろうか。政治的主体としての都市や町に注目することで、従来とは異なった帝国像が描けるのではないか。このような問題意識のもと、本報告では、近代スコラ学の国家理論、スペインにおける自治都市の盛衰、植民地におけるスペイン人の都市建設、先住民人口の集住化、18 世紀の民衆蜂起、19 世紀の独立運動などを検討した。

本報告の暫定的結論はふたつある。

(1) スペインによる征服以後の南米では、近代スコラ学の流れをくんだ共和主義

が底流として存在し、都市や町の自治を支え、王権との関係を形作ってきた。この共和主義は、王権との関係が著しく変化した 18 世紀、一連の政治的動乱として表面化し、19 世紀初めには植民地独立の動因のひとつとなった。

(2) スペイン領南米の先住民社会では、集住化政策により建設された町を舞台として共和主義の制度や理念が内面化された。18 世紀には、先住民の町は明確なアイデンティティと主権意識を持つレプブリカへと成熟し、政治的主体として活躍するようになった。

（齋藤 晃）

配布物：レジュメと資料